



いま、一見斜陽に見える 地方都市が面白い デイトナハウス仕様の 情報ステーション

アフターコロナで更に加速するデジタルネットワーク社会では、
地方の企業城下町の位置づけが好転すると考えています。豊かな
自然と共生しながら最先端のビジネスもできる絶好の環境なのです。

同じ、企業城下町という言葉で呼ばれる街にも、その企業の時代的な位置づけによって街の風情はずいぶん違います。特に近代化遺産と呼ばれるような国家的、重厚長大産業の立地していた街は、一見さびれて収束していくように見えます。明治以来の製鉄の街、室蘭もそんな場所のひとつです。

でき、遊び場所には事欠きません。企業城下町だったころは、企業活動からの税収で回っていたので、周辺地域とはむしろ疎遠でした。でも今は伊達や洞爺湖、登別温泉などと広域に振興策を共有するゾーン、西胆振としての豊かさがあります。

近代／モダンを一早く卒業して、ポストモダンに移行する。適度に便利で都市的なのに、すぐ近くに手付かずの大自然、例えばアメリカのポートランドって、こんな環境なのかもしれません。新しいアイデアや創造性も、この豊かな環境から生まれてくるはず。

今回ご紹介する、デイトナハウスのベーカリーカフェは、オーガニックなパンを提供しながら、実は世界とつながっていることが実感できる、21世紀型のニッポンの店舗のプロトタイプなのです。

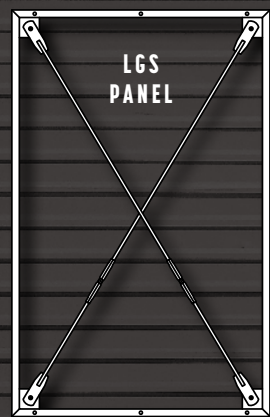
Monthly Theme

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ

DH×L

DAYTONA HOUSE×LDK

CASE 55



38

PANELS

What's DAYTONA HOUSE ?

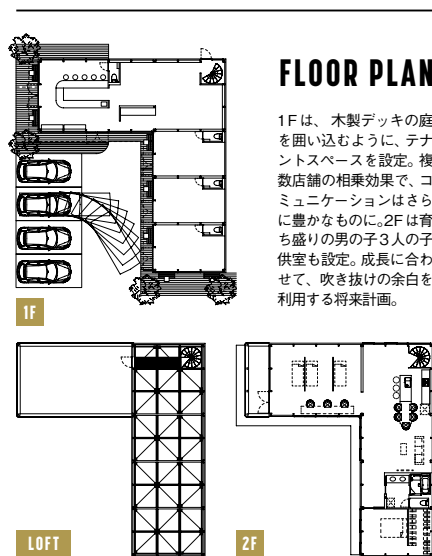
デイトナハウスを構成するのは、LGSと呼ばれる軽量鉄骨のパネルで、厚さ3.2mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅180cm、縦270cmの長方形に溶接して製作しています。対角線のクロスしたパーツは、「ブレース」と呼ばれる筋違いで、力の伝達を受け持つ大切な役割を持っています。"柱"と"梁"と呼ばれる縦と横の部材を使って軸組を作っていく一般的な建築とは違って、デイトナハウスはこのLGS パネルを連結することで住宅、ガレージ、別荘、店舗、マンションなどの様々な建築を可能とする、全く新しいカタチのシステムなのです。つまりこのLGS パネルを使った建物全てがデイトナハウスと言う訳です。パネルの枚数を数えるだけで、建築の広さ、およその予算がイメージできる分かります。と、パワーコーディングが施されたその鉄の素材感が醸し出すハードボイルドな空間のテイストも持ち味です。

www.daytona-house.com

● INFORMATION
LDKinc.

代表: 玉田 敦士
www.ldk.co.jp
03-6228-4933

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本である CAR&HOME にて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社 LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。



FLOOR PLAN

1Fは、木製デッキの庭を囲い込むように、テナントスペースを設定。複数店舗の相乗効果で、コミュニケーションはさらに豊かなものに。2Fは育ち盛りの男の子3人の子供室も設定。成長に合わせて、吹き抜けの余白を利用する将来計画。



2Fの施主住居のリビングルームの吹き抜け空間。家族の憩いの場所であると同時に、地域の人たちとの会合の場所としても有効に機能する。吹き抜け空間ならではの程よい開放性。都心でありながら狭く煮詰まったイメージとは無縁。ノビノビとディスカッションができるのです。

INTERIOR

パン屋さん店舗内部の様子を表現したイメージ。メリハリの利いた艶消し黒の鉄骨フレームが、ほどよく空間を分節してアクセントになっています。広場で子供を遊ばせて、コーヒープレイクも楽しめる、理想的な空間。ここで地域の情報もごく自然に摂取可能です。

SHOP

Photo/Ken TAKAYANAGI Text/Atsushi TAMADA



KARUIZAWA RESORT HOUSE

アフターコロナに意識するデイトナハウスの住宅の作法 “森に住むということ”の意味の変容

このほど軽井沢に完成した高床式のリゾートハウスは、デイトナハウス独自のノウハウの集大成ともいえるものです。
大きな変化の時代に考える“自然との共生”と“普遍的な建築”の精神が融合した“新しいカタチ”なのです。

人為と自然の絶妙の関係性

僅か100年の間に、人類は世界中を都市化してしまっただけで、地球環境のバランスが崩れ始めています。100年かけて欲望を最優先した社会システムを作ること、瞬く間に環境が悪化。このままでは、持続が不可能になり、地球がもたないという識者が警告を発しています。

そもそも、都市はすべて人間の思う通りにはならないものです。人為と自然あるいは、意識と自然、といってもいいかもしれませんが、そのバランスを調整する必要性が今叫ばれているのです。

歴史的に、そのバランス感覚は家の作り方でわかります。日本やアジアの昔の人々は、総じて自然と調和するような家の作り方をわきまえていました。一方、西洋発祥の近代建築は、自然に対抗して統御する考え方。テクノロジの発達で自然を屈服させるといふ考え方もいまだに根強いのです。だからこそ、いま改めて共生をテーマにしたライフスタイルを模索するべきなのかもしれません。

高床式とプロポーション

1950年代、20世紀の真ん中にアメリカ西海岸に一連の若手建築家によるムーブメントがありました。

ミッドセンチュリースタイルと呼ばれるその一連の建築群は、実は日



軽井沢の別荘地は一般に300坪の土地区画で建蔽率は20%です。必然的に隣の区画とは距離が取れますが、それでも目線の交錯は避けたいところ。森に配慮しながらも建物の配置と向きはデリケートな作業です。隣の家屋に背を向けながら、通りに対しても顔を見せる、更にプライベート感も演出する配置をとっています。構えを大きく、満足感のある木製デッキの面積比率も大切な要素です。



CURRENTLY FOR SALE

軽井沢リゾートハウスの販売価格や仕様、スペックなど詳しい情報は、このQRコードから専用のウェブサイトへアクセスしてご覧いただけます。



と思えるのです。適度な湿度が土に保持されている森の中では特に、高床式の基礎が有効なのです。

昨今の木造建築では、土にビニールを敷いて、コンクリートで、ベタ基礎を作ることが主流ですが、これも「土」を忌み嫌う、都市化的な考え方。「土」を残すことで、木々も元気に生きていく。木々そこに暮らす生き物たちとの共生を第一義にする。それが、森で暮らす、ということ。この高床式は、先端羽根付き銅管杭という最先端材料を応用したデイトナハウスのオリジナル工法なのですが、耐震性、森との共生、更にデザイン性も同時成立させた、新しいカタチです。空中にふわりと浮かび上がることで、四角形の四辺が初めて意識にのぼり、その時、その縦横比率が美観と関係します。いわゆるプロポーションです。傾斜のある敷地でも、土地の形質をRCの擁壁で

変質させることなく、土地に寄り添うように建築する。この「作法」を成立させながら、大きく張り出した木製デッキ部分も含めてプロポーションを整える。高度なミッドセンチュリーの技法を成立させています。

開放性とプライバシーの両立

開放的なガラスの開口部を更にミッドセンチュリーの作法で強調します。それは、スルーと呼んでいる手法です。例えば森に向かって大きく張り出した庇。天井に貼られた木板貼り、ガラス一枚隔ててそのまま外部に伸びていくような表現です。独特の自然との一体感。その時インテリアは、単なる調度品ではなく、森の中のオブジェになり、脳細胞が喜ぶ室内空間に変化するのです。

とはいえ、内から外の森がクリアに見えるだけでは、プライバシーが確保できません。そこで、ドイツ製の

電動外部ブラインド「ヴァレーマ」を装着しています。ブラインドの羽の角度の調整で、外部環境への開放度合いは自由自在に選択できるのです。

「リマスター」という作法

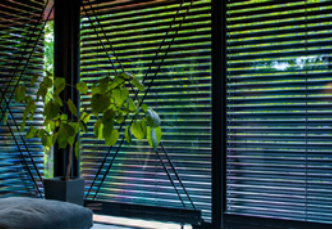
わきまもと満足感の両立

デザインII物のカタチという意味では、古今東西いろんなカタチはすでに出そろっています。カタチの新しさを無理やりに追求せず、過去の最も均整の取れた習作のエッセンスを現代の技術と手法で再現する。それは、昇華、ともいえるさらなる高みであり、「リマスター」と呼ばれる概念です。自然に対しても、過去の文化遺産／先人の営為に対しても、謙虚なわきまを大切にしつつ、永い年月、愛着が持続するような建築。

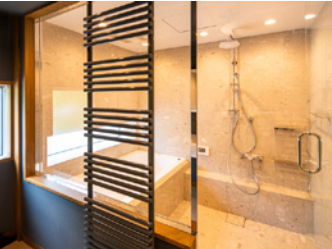
デイトナハウスの軽井沢モデルハウスはその境地へのチャレンジとして位置づけられているのです。



● 外部への開放性とプライバシーの確保という難しい問題を、高度なレベルで両立させてくれるのが、ドイツ「ヴァレーマ」社の外付け電動ブラインドです。リモコン操作で面所別には開きの角度も調節可能。外からは見えなようにブラインドを下ろしても、内からは視線を遮るものなく視界良好。高床式とのベストマッチが実現しました。



● バスルームもユニットバスながら、最上級のガラス張り仕様です。断熱を十分施した暖かい浴室。[PS]社のタオルウォーマーが余分な水分を乾燥させ、湿気やカビとも無縁の清潔感を大切にしているのです。脱衣室の床のココヤシマットも足にうれしい仕様です。



● 暖房設備には、PS社のラジエター式の温水暖房を採用しています。ガラスの大開口の各所には、ペリメーターヒーティング。冬季には、窓面の負荷を熱の対流で除去します。これも開放性と居住性の両立をデザイン的に処理した逸品です。大谷石の面には大判のパネルヒーターを設置。



GARAGE

軽井沢でも、お馴染みのデイトナハウスの鉄骨ガレージ仕様は健在です。ガレージは高床式ではなく、通常に基礎を採用しているので、高床の分天井の高いガレージが成立します。キャンプ道具やウインタースポーツのギア類など、思う存分格納可能なのです。



EXTERIOR

まるで能舞台のような伸びやかな木製デッキは、この家の特等席。デッキチェアを出して、プライベートな森林浴は最高の贅沢です。上下二段になったリズムカルなプロポーションが、静かな満足感を増幅してくれるのです。デッキの先端は傾斜の付いた地面から2mの高みへ。まるで木登りをしたような感覚です。



INTERIOR



森と一体空間の様なリビングルーム ただただソファで鳥の声を聴く快楽

本の建築を参考にしたといわれています。それまでの西洋建築とは違って、自然に対して開放的なデザインが際立っていました。第二次大戦終了直後、若い建築家の感性は、すでに、人為と自然のアンバランスに気が付いていたのかもしれない。

実はこのデザインムーブメントの源流は、自然に対して開放と調和を旨とした、日本の旧来の建築にあると言われています。デザインや物のカタチには、理由があります。高床式も単なる思い付きでカタチが決まっているわけではなく、合理的な理由があり、だからこそ心から美しい。

一方はガラスの大開口で森への一体感。一方は質感のある素材で壁を形成する。これもミッドセンチュリーデザイン定番の作法です。セレクトした素材は大谷石。自然で優しいほのかなグリーンの配色は、こころを安らかに静めてくれる「和」の素材です。天井にメリハリとリズムを刻む鉄骨の梁の素材感もうれしい要素ですね。

LIVING



BED ROOM

ベッドルームに入ると一気に静かな印象です。上質の布クロスが心を落ち着かせてくれます。廊下の幅で作成した木製引き戸は、就寝時は壁になり、開放性とプライバシーを両立させる優れたものです。ここから愛車が眠るガレージが覗けるのも、デイトナハウスらしい構成です。



OTHER DETAILS



● ドイツ、「ボーゲンボール」社の高級キッチンの大理石カウンターの存在感が、大谷石の壁に呼応します。この重量感のあるキッチンが、2本の細いステンレスの足でふわりと浮かび上がる様は圧巻。建物の浮揚感を対をなすワンランク上の意匠性です。厚みのある大理石独特の3面カット(ダイヤモンドカット)も妥協がありません。